

医師国家試験の在り方に関する研究

研究代表者 高木 康（昭和大学医学部教授）

研究要旨

医師として国民から信頼される医療を実施するには、医療人としてのプロフェッショナルリズムを涵養し、十分な知識と技能を修得しており、医療人としての態度を涵養することが前提である。これら知識、技能および態度の修得の評価は、知識は必修項目、総論、各論から出題される MCQ500 題により行われている。

参加型臨床実習の student doctor（学生医）となるための共用試験での知識を問う問題は CBT（computer-based testing）により行われている。この CBT では通常が多肢選択肢問題（MCQ）だけではなく、後戻りできない機能を設定すること等により、医師として重要な臨床推論能力を評価する問題を作成することも可能である。

本研究では、医師国家試験の在り方としての知識を問う筆記試験の有効な手段としての CBT の現状と将来について調査研究を行った。すなわち、

諸外国での医師国家試験の筆記試験の実態を調査し、特に CBT 形式での出題形式、作成過程などを明確にする。

CBT 形式での利点と設備を含む問題点を明らかとして、医師国家試験に導入する際のシステムについて提言する。

ことを目的として、

台湾、米国での医師国家試験と CBT 導入の現状を視察して、医師国家試験の問題形式、作成過程、評価基準等の実態を調査した。

医師国家試験における CBT の活用の有効性、特にマルチメディア導入の現状と諸問題について、討議を行った。

調査を行った米国と台湾ではすでに CBT を医師国家試験に導入しているが、CBT への動画・マルチメディアの導入は計画はあるものの諸事情により行っていないことが確認された。また、この領域の専門家の講演では動画やマルチメディアの導入の可能性は高いが、我が国の医師国家試験の現状（多数受験生の一斉の受験など）では困難な点も多いが、動画やマルチメディアの導入による CBT は受験生のより深い知識の有無を評価できる可能性も高く、検討する価値が高いことが確認された。今後は小規模での実施を念頭にマルチメディアを使用した CBT の開発を行うことが我が国の医師国家試験の改善に繋がるものとの結論となった。